

『禁じられた歌ービクトル・ハラはなぜ死んだか』 八木啓代/著 晶文社

小さい頃から禁止されると寧ろやりたくなっちゃう天邪鬼の私。「禁じられた歌」と聞くと歌いたくなるなぁと思いつつ手に取った本。

1970 代のチリや南米を取り巻く社会情勢、そんな中で民衆の音楽・歌はどのように響いていたのか。ビクトル・ハラの背負ったもの。。。一気に読んでしまいました。著者である八木さんの破天荒ともいえるフィールドワークの記録もその大胆な行動力と鋭敏な判断、洞察力に驚きます。南米の伝説的な音楽家達が語った宝物のような言葉が散りばめられていてキラキラ眩しい。

『人間はなぜ歌うのか』 ジョーゼフ・ジョルダーニア/著 森田稔/訳 アルク出版企画

民族音楽学者であるジョーゼフ・ジョルダーニアによる「うた」の起源をめぐる考察。ポリフォニー歌唱（一群の歌い手たちが異なるメロディを歌うこと）の起源について、世界中にひろがる様々な歌唱スタイルの分布が地域による特徴と共に紹介されていて興奮する（例えば「アフリカ文化ではリズムと舞踊が非常に重要で、それに合わせて踊ることができなければ、それは音楽ではない。というほどである。」とか）

「言語と音楽のどちらが不変であるか？」という疑問に対する興味深いエピソードや音楽の起源に関する様々な考え方（例えばチャールズ・ダーウィンは「音楽を楽しむ事も、音楽をつくり出す能力も、ともに人間の通常の生活に直接の役には立っていないので、これは人間に備わっている能力のなかでも、最も不思議なものの一つに数えられるべきだろう」と述べた。とか）

現代社会において、人は大人になってから一音符も歌うことがなくても十分成功した人生を送ることができると考えられるが、そもそもどうして人間は歌うのかという考察を含めてとても興味深い一冊。

『あいたくて ききたくて 旅にでる』 小野和子著 PUMPQUAKES

著者である小野さんが実際に民話調査に歩き回り集めた民話とその旅の記録。民話だけでなく、その民話集めの旅がどんなであったか、それを語った人達がどんなであったかが、思わず噴き出してしまうような楽しいエピソードや、息をひそめて手に汗握るような経験交えて当事者の言葉で生き生きと鮮やかに語られる。集められた民話もそれぞれ語ってくれた人の語り口で、読んでいて何とも言えない暖かみと楽しみがある。

『夕凧の街 桜の国』 こうの史代/著 双葉社

戦争をテーマにした作品で、市井の女性の目線でこんな風に生き残ってしまった人を描いた作品を知らない。戦争というものを受け身でただ耐え忍び、幸いにして生き長らえても残された人がどの様に苦しみ、生きている事に罪悪感を持ちながら日々を過ごす様子を静かに、優しく語りかける作品。世界中で読まれて欲しい一冊。

『あめだま』 ペク・ヒナ/著 長谷川義史/訳
ブロンズ新社

ユーモアと優しさが溢れているペク・ヒナの絵本が大好き。アニメーションを学んだ彼女自らが人形制作、セットづくり、撮影までひとりでこなしているらしく、その独自の世界観に引き込まれてしまう。まずそのリアルと非リアルのバランスが絶妙な登場人物達、奥行きと色彩の豊かさを見た時、最近の絵本によく見る温度感のないフラットなビジュアルを残念に思う私にはとても新鮮な喜びだった。そして長谷川義史さんの訳がとっても楽しい。岸和田を離れてかれこれ 20 年、大阪弁に飢えている？私、時々引っ張り出しては声に出して読んでいます（笑）。

『武甲山ー未来の子供たちへ』 笹久保伸/著
キラジェンヌ

この『武甲山ー未来の子供たちへ』は笹久保伸の初めての写真集。彼の生まれ育った町（埼玉県秩父）で“ 神の山 ” として古くから地域の人々の心の拠り所とされてきた「武甲山」を撮ったもの。この山は聖地として崇められながら、山から採れる石灰岩により高度成長を支える為という大義名分で約 100 年に渡り今もなお毎日削り続けられているという。

毎日破壊され山というよりピラミッドのようになっていく故郷の山への愛と哀しみ、それを黙認している社会への批判が、現実なのか幻なのかわからなくなるような優しい光と異様なオーラを纏った写真となり、深く心に突き刺さるアート写真集。

CD『ギター』 笹久保伸/演奏 Beans Records

「神隠しから還った子」という異名を持つ笹久保伸は作曲家・写真家・美術家・映画監督など幅広い芸術活動を展開しているが、何と言っても彼の本領はギタリスト。まだ 30 代後半にして 29 枚もの CD をリリースしている彼だが、これは 27 枚目の CD。20 代でペルーに渡り現地で修行した彼の血肉となっているアンデス音楽、「秩父前衛派」としての芸術社会活動にも通じる南米の民衆歌、そして彼自身のオリジナル曲まで、正に美味しいところがギュギュギュッと詰まった名盤。一曲目から音楽の精霊が乱舞するのが目に浮かぶような冴え渡った演奏です。本物のギタリスト。まあ、つべこべ言わずとにかく聴いてちょうだい！という 1 枚。

CD「POP SONG」 吉川真澄+佐藤紀雄/演奏 Zipangu Label

手前味噌で申し訳ないが、私自身初めてリリースした CD で思い出深い一枚。

ギタの一佐藤紀雄さんと組んでいるユニット「Duo うたほぎ」が名付けられる前の 2009 年録音。武満徹作曲と聞くと難しいんじゃない～？と言う人が多いかも知れないが、彼自身が「ポップソング」と呼ばれる事を望んだ通り、とても親しみある歌ばかり。オリジナルはラジオドラマの主題歌だったり無伴奏混声合唱の為にかけたりしたものを新進気鋭の現代の作曲家達にアレンジしてもらったもの。

『季節を知らせる花』 白井明大/著 山川出版社

どんな世の中になっても、植物たちは人の世の騒ぎとは対照的に、静かに、力強くマイペースな姿を見せてくれます。土筆、れんげ、桃にさくら、あじさい、あさがお、、、私たちの暮らしは自然の中にあるんだなぁと2020年は特に強く感じました。めぐる季節の花たちとそれらに触発され生まれ出た詩歌たちが、詩人白井明大さんの言葉と、沙羅さんの木版画によって集められています。まるで本の中から季節折々の花の匂いを纏った風が吹いてくるような、爽やかで暖かみのある作品。

CD 『四季の四部作』 平野一郎/作曲 吉川真澄/演奏 Waon Records

同時代を生きる作曲家で一番尊敬する作曲家のひとりである平野一郎氏に、独唱の作品を。と委嘱して出来上がったのがこの「四季の四部作」。

—以下作曲家のノートより引用—

春は生きとし生けるものへの春の訪れと、
初々しい大気に醸された歌の誕生を、
夏は生者と死者の魂が往き交いざわめく盂蘭盆の頃、
重い陽光に照らし灼かれた日本の海辺の原風景を、
秋は聖なる山の樹霊を降ろし、荒振る民が地車を曳く。
屋形の上の使いの鳥は、烈しい囃子に呼び起こされて、忘れられた神の名を叫ぶ。
神威を畏れ、恩恵に謝し、豊穰を祝う、民の秋祭の厳粛と熱狂と寂寥を、
冬は深深と降り積む雪の庵、死せる陽光を振るい起こす、媼めいた蘇生の咒文。
凍える大気にさやさや揺れ散る言の葉の薄影を、此の一条の女声に映した。